



Jason Ginsburg（京都大学人間・環境学研究科総合人間学部）・寺田寛（大阪教育大学英語教育部門）
日本英文学会第97回大会（2025年5月31日）@東京大学

京都大学のジェイソン・ギンズバーグと大阪教育大学の寺田寛が2025年5月31日に日本英文学会第97回大会で発表した内容の要旨を以下にまとめます。

この発表は、主に英語の動名詞がどのような構造をもち、どのような仮定を経て派生されるのかについて、最近の生成文法理論の極小主義プログラムの枠組みで説明するものです。

最新の極小主義理論は、最低限の原理に基づいて言語事実を説明しようとする立場から次の主な提案を取り入れています。

- 位相理論(Chomsky 2001)：派生の記憶の負担を軽減する理論
- ラベリング理論（Chomsky 2013）：投射を決定する理論
- コピー形成（FormCopy）操作(Chomsky 2021)：派生の履歴の記憶負担を軽減する理論
- 自由併合(Chomsky 2001, 2013, 2015)：併合操作（2つの要素をまとめて1つの構造にする操作や移動の操作）が無条件に適用されることを許すという仮定
- 強い極小主義命題（Strong Minimalist Thesis）(Chomskyなど)：言語外の体系から求められる条件を言語は最適の形で満たせるように言語はできているとする主張（“language keeps to the simplest recursive operation, Merge, and is perfectly designed to satisfy interface conditions” (Chomsky 2010:52))

動名詞構文の主語は一見すると随意的に思えます。

- a. Susan preferred being late for dinner.
b. Susan preferred **John/him** being late for dinner. (Pires 2007:165)
不定詞節の主語の受動化が可能な場合があるものの、多くの動名詞節では動名詞の主語の受動化が不可能です。
- a. They expected **John to read this novel**.
b. **John** was expected to read this novel.
- a. They preferred John swimming.
b. *John is preferred swimming.
c. John swimming is preferred.

但し、知覚動詞の補部としての動名詞節の主語の受動化は可能です。

- a. I saw **Jane leaving the house**.
b. **Jane** was seen leaving the house. (Pires 2007:198)

Chomskyは、「コピー形成(FormCopy)」という考え方を導入しました。これにより、非定形節の意味上の主語は隠在的代名詞PROであるというこれまでの仮定をなしで済ませることができると主張しています。ここではコピー形成を以下のようなより簡潔な形で定義します。

- コピー形成(FormCopy)(cf.Chomsky 2021, 2024)

コピー操作によって、同じ位相内にあるなしにかかわらず、名詞句NP₁が名詞句NP₂をc統御しており（つまり、前者が構造において後者より上位の優位な位置にあり）、かつ、両者が同じ形式を持つ際には、NP₂はNP₁のコピーとして解釈されることが可能になる。

次に、自由併合について。これは、文を構築する基本的な操作である併合は、何の制約に従うこともなく、自由に適用されてよいという仮定のことです。つまり、いかなる要素を文中のどこへ移動してもよいということになります。自由併合の反意語は、その理由が必要な併合つまり、併合操作を行うにはそれを引き起こす何らかの理由がなければならないというものです。何らかの理由とは、素性であると考えられてきました。名詞句や時制や動詞といったさまざまな範疇に素性があって、その素性が正しく機能するように、移動や併合などの統語的な操作が必要になると考えられてきました。この考え方は、真理を突いているように思えます。しかし、これでは、移動を適用するための素性を多く仮定する必要が生じます。移動が起きるようにするために本当は存在しないかもしれないような素性を仮定してしまった弊害が生じてきたと言えるでしょう。そのような問題を解決するために、この発表では、併合操作はなんら素性を満たすためでもなく、自由に適用されてよいと考えるというわけです。

- 自由併合：内併合（つまり移動）が無条件に適用されることを許す (Chomsky 2001, 2013, 2015)：内併合は素性によって引き起こされるのではなく、自由に行われる。

この自由併合にも問題があります。内併合が完全に自由に適用されるなら、一つの句の内部でさえ無限の数の統語操作が適用されることで、その不適格な構造が無数に派生されてしまいます。そこで、併合を制限する必要があります。

そこで提案する仮定は、(12)です。

- (12) Tamper with C-Command Relations

Syntactic operations must tamper with c-command relations.

この条件は、移動が起きた結果、必ずそれまで得られた構造関係を変えねばならないというものです。これにより1つの句が何度も同じ位置に移動（併合）されること（無限ループ）が抑止されます。

以上のことを念頭において、動名詞節がCPであると考えべき理由があることを論じます。(13a-c)=(8a-c))のような例を見てみましょう。

- (13) a. They preferred John swimming.
b. *John is John preferred swimming
c. John swimming is preferred
John swimming

CPを越える移動が位相不可侵条件(Phase- Impenetrability Condition)により阻止されるため(Chomsky (2000: 108, 124), Radford (2016:218)、(13b)の従属節はthat節や(14)のto不定詞節と同じく、CP位相であるためであると分析します。CPを超えるJohnの受動化は一般に容認されません。但し、(7)や(9)のデータは従属節がCPではなくTPであることを示しています。

- (14) a. She wanted [CP John to apologise]
b. *John was wanted [CP John to apologise]

では、(15)の文の派生を考えてみましょう。

- (15) John prefers swimming.

この文の構造は、図7のようになりなります。

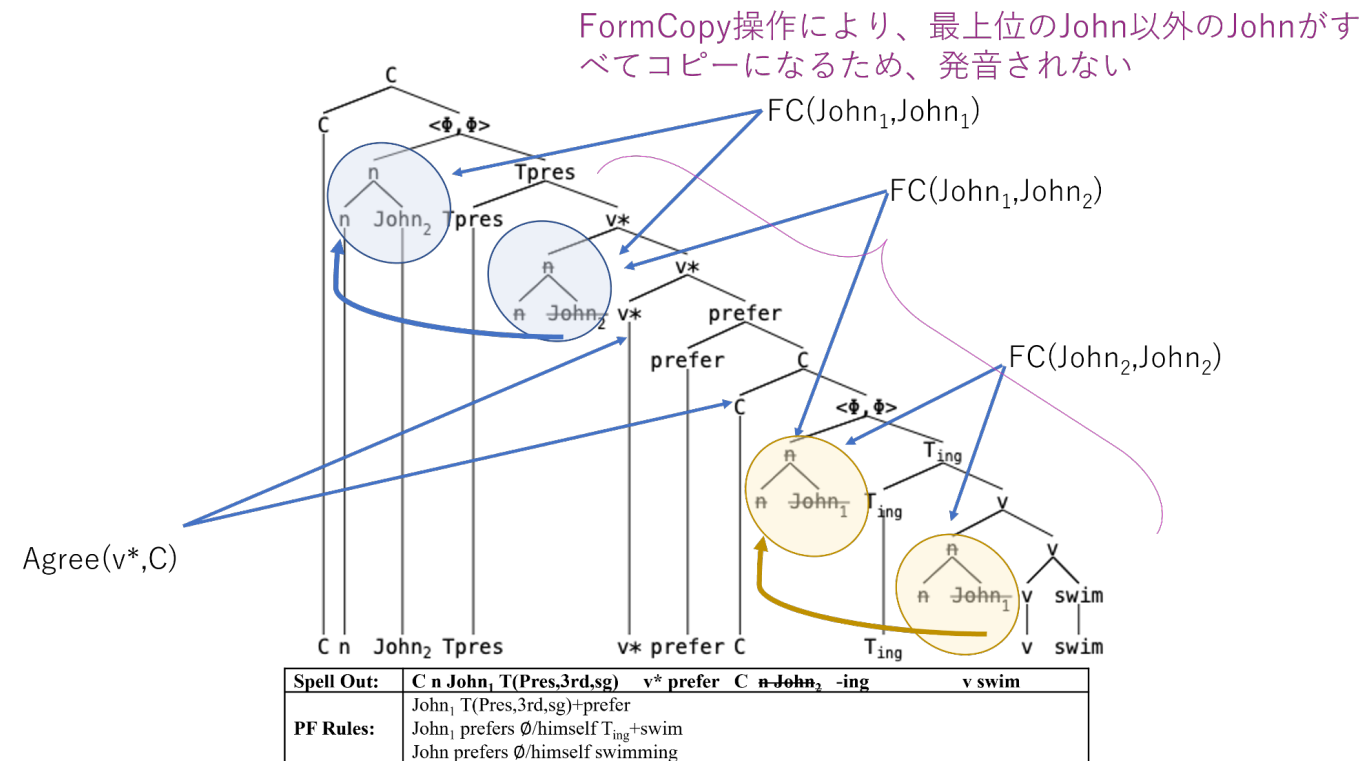


図7 John prefers swimming (Pires 2007:182)

図7では、動名詞節の主語が発音されません。動名詞節と主節のv*P内部に、それぞれ異なるJohnが外併合されます。そして、FormCopyによって主節のTPと併合されているJohn以外のJohnは全てコピーになり、発音されません。位相の主要部であるv*とCはFormCopyを阻止しないと考えると、主節v*Pと併合されているJohn₂と動名詞のT_{ing}と併合されているJohn₁との間でFormCopyが適用されます。

・結論

併合のための駆動力を必要としない自由併合を仮定し、それを制限するための条件Tamper with C-Command Relationsを提案しました。受け身に関するデータから動名詞節がCPであると考えが必要があるとしても、FormCopyがCPを超えて適用されるというここでの仮定により、動名詞節の内部のPROを主節の主語がコントロールする事実を、FormCopy理論のもとで捉えることができることを主張しました。動名詞の顕在的な主語が現れる例やそのほかの動名詞構文にもこの分析が有効であることや、コンピューターモデルを使って判明した自由併合の功罪についても、研究発表の中で論じましたが、紙幅の都合により、割愛します。

参考文献

- Chomsky, Noam. 2000. Minimalist inquiries: The framework.
Chomsky, Noam. 2001. Derivation by phase.
Chomsky, Noam. 2010. Some simple evo devo theses.
Chomsky, Noam. 2013. Problems of projection.
Chomsky, Noam. 2015. Problems of projections: Extensions.
Chomsky, Noam. 2021. Minimalism: Where are we now, and where can we hope to go.
Chomsky, Noam. 2024. The Miracle Creed and SMT.
Pires, Acrisio. 2007. The derivation of clausal gerunds.
Radford, Andrew. 2016. *Analysing English sentences, second edition*.